

史料紹介

『看聞日記』現代語訳(一四)

蘭部 寿樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成(一三七一～一四五六)の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』二(明治書院、二〇〇四年)である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

- 現代語訳(一)～(三) 応永二三年(一四一六)分『米沢史学』三〇号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二号(二〇一四～一五年)
- 現代語訳(四)～(六) 応永二四年(一四一七)分『米沢史学』三一号・『紀要』五一号・『生活文化研究所報告』四三号(二〇一五～一六年)
- 現代語訳(七)～(九) 応永二五年(一四一八)分『米沢史学』三二号・『紀要』五二号・『生活文化研究所報告』四四号(二〇一六～一七年)
- 現代語訳(一〇)～(一二) 応永二六年(一四一九)分『米沢史学』三三号・『紀要』五三号・『生活文化研究所報告』四五号(二〇一七～一八年)

○現代語訳(一三) 応永二七年一月一日から四月二九日まで。『米沢史学』三四号、二〇一八年

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永二七年五月一日から八月三〇日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、(二)を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものはない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

【主要参考文献】

- 横井清『室町時代の一皇族の生涯』(講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年)
- 位藤邦生『伏見宮貞成の文学』(清文堂、一九九一年)
- 小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七(明治書院、二〇〇二～二〇一四年)
- 村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考―」(同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三、二〇一四年)
- 松岡心平編『看聞日記と中世文化』(森話社、二〇〇九年)
- 田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」(『中近

世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）

松蘭斎『中世禁裏女房の研究』（思文閣出版、二〇一八年）

（応永二十七年）五月一日、晴。「良い兆しがあり、とても幸せだ」と予祝した。いつものように月初めのお祝いをした。宮家の女性たちが薬玉作りに一生懸命である。

用健がいちゃったので、しばらく雑談した。

十日に一度の雅楽練習会で、長資朝臣を呼び出して笙を吹かせた。双調の曲五つと朗詠などをした。

足利義満十三回忌のお布施

二日、晴。鹿苑院故足利義満殿十三回忌の御仏事のため、法華経寿量品一卷とお布施の鹿毛の馬一頭を室町殿へ進上した。この法華経寿量品の卷子表地は、下地に蓮華の文様が入り、紅色に淡い藍色が交じったものである。裏地は無紋で光沢を出してある。水晶製の軸で、通常通り平紐が付いてある。鹿苑院殿の書状の裏に、お経を木版印刷した。

お布施の馬は、田向経良卿が御使者として京へ運んだ。広橋兼宣に私の手紙をだして、室町殿へお経とお布施の馬を差し上げるように連絡した。

聞くところによると、室町殿は相国寺鹿苑院に滞在されているそうだ。等持寺法華八講が今日から、新築の八講堂で始められたという。

夕方、田向三位が京都から書状を寄こした。広橋は明日の明け方に鹿苑院へ布施の御馬を牽いていき、室町殿のお目にかけますと

言っているようだ。経師屋によるお経の表装が遅れている。たった今、表装が出来上がったので、急いでお経を京都へ運ばせた。

【頭書】（日記の上方の隙間に書き加えた記事）お経は高檀紙に包んで、柳の経箱に入れた。

三日、晴。三位が帰ってきた。「空が明るくなってきた頃、鹿苑院へ参りました。広橋もすぐに参りました。広橋はお経と馬などを受け取り、室町殿のお目にかきました」という。

室町殿からのご返事は「お経をお送り下さって、うれしく存じます。わざわざ父の書状の裏にお経を写して下さって、お志の程、恐れ多く存じます。また御馬も添えて下さり、これもまたうれしく存じました。宮様によりしくお伝え下さい」とのことだと、広橋は伝えてくれた。

御馬は伊勢貞経伊勢守が受け取ったそうだ。丁寧な返事で、いい気持ちになった。うれしいことである。今日、相国寺でお経を略読して供養する法会があったそうだ。

椎野がいちゃった。またしばらくの間、伏見に滞在するようだ。

薬玉

四日、雨が降った。御薬玉を室町殿へいつものように清原常宗を通して差し上げた。室町殿若君御方にも同じく御薬玉をいつものように御所の女房を通して差し上げた。鳴滝殿御稚児にも薬玉を差し上げた。その他、例年のようにいつもの面々へも薬玉を配った。

今日は青蓮院で十種供養（※）があつて、今出川公行前左大臣や綾小路信俊前参議らが参列したそうだ。相国寺では施餓鬼があつた

という。

さて伝え聞くことには、玉淵和尚がまた逃げ出したそう。原因は飲酒にある。広橋が飲酒を玉淵和尚に勧めたらしい。その広橋卿も室町殿のお心に背いたと言われている。この間、世間で言いふらされているうわさであるから、あまり詳しく記すことはできない。清原常宗からの返事によると、室町殿へ薬玉をお目にかけたら、「おめでたいことで、満足しております」とのお返事だったそう。若君からも女房奉書（※）で「おめでとうございます」との返事が来た。

※十種供養（じっしゅくよう）：法華経法師品で説く十種の供養。華香、瓔珞（ようらく）、抹香、塗香、焼香、絵蓋、幢幡、衣服、伎楽の十種を仏に供養すること。絵蓋と幢幡とを合わせて一種にして、合掌を加えて十種供養とする説もある。

※女房奉書（にようぼうしよ）：主人の上意を受けて、女房が散らし書きで書いた書状。主人自身が出すこともある。

菖蒲の甲

五日、雨が降った。「端午の節供で、とても幸せだ」と予祝した。いつものように御節供のお祝いをした。風呂に入った。我が息子へ菖蒲で作った甲を重有朝臣が献上してくれた。初めての端午の節供なので、お祝いした。

聞くところによると、今日の等持寺八講に今出川実富大納言が出仕したそう。

六日、晴。聞くところによると、相国寺でお香を焚いて説法が行われたという。五山十刹以下の長老や前住職らが全員、招かれたそう。

今日は等持寺八講の最終日である。今出川公富中納言ら出仕した公卿は十七人だそう。

足利義満の塑像

退蔵庵へ行き、鹿苑院足利義満殿に対して焼香した。退蔵庵には足利義満殿の塑像がある。これは、常徳院から送られたものだそう。椎野も一緒にお参りした。田向三位・重有・長資ら朝臣・慶寿丸も連れて行った。指月庵にもお参りした。

帰り道、松林庵に行った。この間、松林庵の障子に絵が描き加えられたというので、それを見てきた。玄超が用意してくれたので、少し酒を飲んだ。しばらくして帰った。

八日、雨が降った。先日の一言観音参詣の帰路、宮家の女性たちが坂迎え（※）をしてくれた。そのお礼として、私や田向三位らが一献の酒宴を主催した。先日の面々が皆揃った。

※坂迎え（さかむかえ）：遠い旅から戻る者を村境などで出迎えて、酒宴をすること。

東門院公尋の死

十日、雨が降った。今出川公行前左大臣の息子である東門院公尋法眼が、今月四日に亡くなっていたそう。今出川家から只今、連絡があった。この訃報に接して戸惑った。大変かわいそうなことだ。その人柄は穏やかなうえに、学問についても才能があり、若くして優れた学者であるとの名声があったそう。いよいよ惜しいことである。

お腹に持病があり、それがこの春からひどくなったそう。その治療のため上京して、今出川家でしばらく静養していた。それで少

し持ち直したので、お寺に戻ったそう。そうしたら、持病が再発して、とうとう大事にいたってしまったという。

人の寿命は年齢に関わらないというものの、今更ながら驚かされた。この若者の死を心から悼むものである。

十一日、晴。今出川家へ東門院の死亡見舞の使者を送った。

十日に一度の雅楽練習会で、黄鐘調の曲三つと盤渉調の曲三つを演奏した。長資朝臣が笙をやめてから相当経つので、練習しなければならぬ楽曲は無数にある。

筑前国赤馬荘

十四日、晴。太子堂の長老が田向家に来た。筑前国赤馬荘は昔から速成就院の領地である。速成就院とは、太子堂の正式な寺号である。そのことを示す証拠書類数通を見せにいらつしやつたのである。その書類のうち（当時の荘園領主「本家」である）萩原殿直仁親王の命令書には、太子堂に年貢収納の事務取扱担当者がいるという所見は全くないということだった。したがって、太子堂に御年貢を収納させるのは困難なことであると言ってきた。

そのうえ、赤馬荘の年貢半分を軍事費として守護が収納することを認めた將軍の命令書などが筑前国守護へ正式に出されているが、太子堂がそのことを拒否している。それで現在は、いまだしつかりと事態が収まっていない状況にある。「なんとか事態が収まった後に、寺僧たちとさらに相談して、重ねて当方へ申し入れます」と長老は仰った。

とりあえずお礼（※）として酒一献分の錢三貫文を宮家宛に持参してきた。三位にも別にお礼を用意したそう。宮家御所へ長老を

呼び出して、対面した。その後、すぐに出ていった。一献分の錢が納められたことを祝って、酒を飲んだ。

※「お礼」：伏見宮家は赤馬荘の荘園領主（本家）であり、太子堂は荘園領主（領家）である。しかし近年、太子堂は赤馬荘を実効支配できておらず、租税は未納のままであった。そのため、宮家から幕府管領などに働きかけて、太子堂が同荘の租税を徴収することを認める幕府の命令書を出してもらったのである。これは、その取り次ぎに対するお礼である。応永二十六年（一四一九）十一月二十二日・十二月四日・同七日・同十九日条を参照のこと。

今出川公直は私の養父

十五日、晴。来たる十七日が故今出川公直左大臣入道の二十五年忌にあたる。そのため、私自らが写経した法華経寿量品一卷と錢二貫文の布施を今出川家へ送った。今出川公直は私の養父なので、特に重い恩義がある。それで法事にあたって懇志を示したのである。

行蔵庵禁酒令

そのために、今日から行蔵庵に酒を入れることを禁止することにした。

十六日、晴。いつものように身を淨めた。宮家の女性たち面々が行蔵庵へ行った。賑やかな集まりになったようだ。

宮家女性たちのお宮参り

十八日、晴。宮家の女性たちや男どもが、一言観音に参詣した。参詣者は、兄の妻であった上臈・私の妻の二条殿・重有朝臣・長資朝臣・寿蔵主・比丘尼・局女・女官らである。すべて寿蔵主が取りはからったお参りらしい。椎野も同じく参詣した。ただし椎野は女性たちの

集団とは別に一人で参詣に行った。

女性たちは醍醐の閻魔堂や菩提院なども廻ったそう。菩提院では如法経供養に参列したらしい。供養が終わった後、宮家に戻ってきた。所々でお弁当を食べるなど、賑やかなことだったようだ。

七仏薬師法

二十日、朝は晴れていたが、昼になって雨が降り出した。このところ日照りが続いている。朝廷が雨乞のため、寺社に御供えを捧げた。諸寺で御祈祷が行われた。それで少しだけ雨が降った。ありがたいことだ。

重有朝臣が京都から戻ってきて、世間話を聞かせてくれた。来た二十四日に上皇御所で七仏薬師法（※）が行われるそう。導師は妙法院宮だという。後小松上皇様が霊夢をご覧になったことにより、この法会が行われるらしい。この七仏薬師法が上皇御所で行われるのは、およそ近代では絶えてなかったことである。去る観応年中（一三五〇～五二）に上皇御所で行われた例があるという。

泉涌寺・戒光寺の本寺末寺相論

さて泉涌寺と戒光寺の間で、本寺末寺の争いがある。泉涌寺は戒光寺が泉涌寺の末寺だと言っている。戒光寺はそのような事はないと反論している。どちらの主張にも決まらない。それで上皇御所から室町殿へ、戒光寺は泉涌寺の末寺となるようにお口添えしてほしいと申し入れなさったそう。しかし、細川満元管領や細川義之讃岐守らは、戒光寺を贖負するように室町殿に進言しているという。それで争いがまとまらずにいたところ、去る六日に戒光寺の長老が寺から逃げ出してしまった。それでこの争いは戒光寺が負けてし

まった。しかしそれでも、戒光寺が泉涌寺の末寺となることはまだ決まっていない。とりあえず両寺の争いをお止めにはなったが、上皇様としてはどちらとも決着をつけないまま放置なさっているようだ。

さて、今出川公富中納言は、昨日、男子を儲けたそう。母親は故東坊城長頼朝臣の娘だという。祖父となる公行前左大臣も喜んでるそう。

※七仏薬師法（しちぶつやくしほう）：薬師如来ほか六仏を本尊として延命・息災・安産などを祈る法会。

二十一日、雨が降った。十日ごとの雅楽練習日なので、太食調の曲六つと朗詠などをした。長資朝臣も参加した。

納涼の船遊び

二十三日、晴。納涼のため、娘や宮家の女性たちが遊山に出かけた。私もまた、重有・長資ら朝臣を連れて勝手に同行した。東舟津で草刈り舟に乗り、近くを漕ぎ廻った。中島で舟を下りて、しばらく涼んだ。その後、指月庵へ行き、休んでから帰った。

琵琶法師の安一座頭

二十四日、晴。冷泉正永が来て、世間話をしてくれた。上皇御所で今日から七日間、七仏薬師法が行われているそう。いつものように風呂に入った。琵琶法師の安一座頭が来て、平家物語を語ってくれた。

二十五日、晴。毎月恒例の連歌会を長資朝臣と正永が当番として準備してくれた。参加者は椎野以下いつもの面々である。安一座頭も参加して一〇二句ほど付けてくれた。

大工の源内次郎

二十六日、晴。大工の源内次郎を呼んで、小規模な工事をさせた。御風呂場の前、東側に竹製の垣根などを造らせた。重有朝臣が工事監督をした。正永が帰っていた。

二十七日、晴。室町殿が病氣だそう。お腹の病氣らしい。いろいろと噂がでている。醍醐寺三寶院主が修法の壇の前で病氣が治るよう祈禱をしているそうだ。

二十八日、晴。垣根がまだ完成しない。大竹がなかなか手に入らないので、伏見荘内の各寺庵に依頼して、竹を献上させた。竹を依頼した寺庵は、大光明寺・蔵光庵・行蔵庵・退蔵庵・禅勝庵・光台寺・楊柳寺などである。

さて、御香宮の拝殿の屋根が壊れたので、土倉の宝泉が出資して、屋根を葺き替えさせたそう。神様を敬っている姿勢は、神妙である。

安一座頭が来て平家物語を一〇二句語った。褒美として琵琶を弾くバチを与えた。

三十日、晴。今日、垣根が完成した。御香宮に椎野と一緒に参詣した。日照りがひどい。民衆は慌てふためいている。まことにかわいそうな有様だ。

退蔵庵の団扇

六月一日、晴。いつものように月初めのお祝いをした。朝早く御香宮・山田宮・愛染王堂などを参詣した。椎野・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸らを連れて行った。

いつものように十日に一度の雅楽練習会をした。盤渉調の曲七つ

と朗詠などをした。長資朝臣も参加した。

ところで退蔵庵主が団扇を一本献上してくれた。思いがけないことで、うれしかった。

鹿の怪異

二日、晴。上皇御所の七仏薬師法は、今日が最終日である。本当は昨日が最終日だったのだが、上皇様にとって衰日（すいにち）というよくない日だったので、最終日を今日に延期させたのである。

先月の頃、鹿一頭が朝廷や上皇御所へ走り込んできたので、追い出させた。その後また、裏辻実秀中納言の屋敷に走り込んだので、捕獲して吉田宮に放した。その後、その鹿は犬に噛み殺されたそう。この怪異があったため、今回、七仏薬師法が行われたそう。

また聞いたところでは、赤松義則入道の末子である五郎が死に、また従者で古老の富田入道も死んだそう。五郎は赤松義則最愛の子だったという。赤松入道はとても悲しみ歎いているそう。

不動堂前山の石

四日、晴。不動堂前山の石を一つ取ってきて、前庭に立てた。

伏見御所旧跡の石はほとんど退蔵庵に取られてしまった。滝頭の石以外の石はほとんど残らず取られてしまい、残念である。父太通院の時代に退蔵庵が御所旧跡の石をほしいと言ってきた。それで石を少々取るぐらいにしておくべきところが、大石をほとんどすべて取って行ってしまったのである。恨めしいことだ。

今夜、浄隠庵・芳徳庵などに盗人が入って、少々物を取っていったそう。きっと内部事情に詳しい者の犯行であろう。

弘法大師自筆の金剛光焰經

五日、晴。田向三位が太子堂へ出かけた。筑前国赤馬荘について話し合うためである。弘法大師自筆の金剛光焰経は伏見宮家秘蔵の御経である。赤馬荘との関係で、この御経を太子堂長老へ渡すことにした。この荘園のことを善処するためのお礼として渡すのである。夕方に、田向三位は帰ってきた。

田向三位は長老と対面した。長老はまず御経のことを喜び、寺の重宝に致しますと言ったそう。赤馬荘について、太子堂には確かな証拠書類がないので、僧たちは歎いているという。伏見宮家を持っている証拠書類は確かなものである、それについて話し合った。長老の考えとしては異論がなく、寺僧たちも異議を唱えなかった。いずれにせよ、今後、話し合いを続けましょうというのが、長老のお返事だったそう。

若狭国松永荘

祐誉僧都が一献のお酒を少し持参してきた。対面して話すことは、若狭国松永荘課役の四分の一を守護請にする契約を結んだところ、近年、守護からさっぱり年貢が送られてこない。それで將軍に訴えたところ、「幕府から厳しい命令があつたので、松永荘はすべてお返しします」と、若狭国守護代の三方範忠人達が書状を出してきたそう。松永荘全体を祐誉僧都が支配することになったという。

この荘園の現地管理の職は、故勝阿が御恩地として支配していた。それを祐誉僧都が相続するというので、その継承を承認していたものである。松永荘では、課役銭十貫文を収納している。松永荘の領家職は、綾小路信俊前参議（※）が御恩地として支配しているところである。

ろである。

夕方、丸目池にて夕涼みをした。椎野・重有朝臣以下がお供した。※綾小路信俊前参議：綾小路信俊は中風が再発したため、御恩地である松永荘を子の綾小路資興に譲り、伏見宮貞成もその継承を承認している。応永二十七年三月六日・九日条。

七日、小雨が時々降った。一日より朝廷は四つの大きなお寺に雨乞いするようお命じになっており、特別に祈禱しているそう。最近、これほどひどい日照りはなかったようだ。祇園会も全国的に飢饉なので、派手には行われていないという。祇園の内祭を少し椎野が執り行ってくれた。田向三位以下寿蔵主らが内祭に参列した。

八日、晴。夜になって雨が降り出した。椎野が寺に帰った。夏の修行期間中に数日間も伏見に滞在しており、椎野は周囲から批判されていた。寺僧が意見を言っても、椎野は全く聞き入れなかった。もったいないことである。

法安寺へお参りした。願い事があつたのである。薬師如来へのお百度参りなどを成し遂げた。

法安寺大般若経勧進

ところで法安寺には大般若経が無いそう。それで大般若経を新たに書写して奉納するために、諸人に勧進をするそう。私も三十巻分（※）の銭を寄付した。田向三位・重有朝臣も同じく寄付をした。そして勧進帳に各々の名前を書き入れた。少し酒を飲んでから、夕方に帰った。

※「三十巻分」：原文では「三帙」とある。帙は和本を包む覆いのこと。応永二十七年八月三十日条では十帙で百巻とあるので、ここで

も大般若經三十卷分の意味にとった。

播磨国国衙領の領地調査

九日、晴。重有朝臣が清原常宗に播磨国国衙領(※)の領地調査の件について聴取するために出ていった。そして夕方に帰ってきた。常宗によると、「領地調査の件については、先月二十四日に將軍へお話ししてあります」とのことだった。將軍は「証拠となる書類がなければ、播磨国守護へ命令することは難しい」というご見解だったそう。それで常宗は、「証拠書類を選び出して、重ねてお申し出ください」と申したという。

重有はさらに勧修寺へ向かって、このことを詳しく話したそう。勧修寺検非違使別当もこの二十四日に室町殿へ行つたそう。その時、室町殿は「領地調査については伏見宮様から伺っている。事務取扱者として取り次ぎがないのはどういうことだろうか」と仰つたので、勧修寺は「思うところがありまして、差し障りがございました」と返事をしたそう。それで常宗を通して改めて申し入れをしたという。いずれにせよ、証拠書類がないことには正式に命令をすることは難しいというのが室町殿のお考えだということは、勧修寺検非違使別当も同じく言っていたそう。重有朝臣は、「証拠書類をさらによくよく探し出しておきなさい」と勧修寺検非違使別当にも申し付けておいたそう。

琵琶法師の相一検校・専一検校

さて琵琶法師の相一検校と専一検校が退蔵庵に來ているそう。二人とも当代の名人だという。まだ彼らの芸を聞いたことがないので、興味津々である。それで寿藏主を通して退蔵庵主に彼らの平家

語りを聞いてみたいと申し入れた。問題ありませんという返事だったので、夜の闇に紛れてお忍びで退蔵庵に行つた。すぐに客殿で二人が平家物語を語った。「高倉院紅葉御賞翫事」・「康頼入道疏黄鳥祝事」・「後鳥羽院御位」・「文徳天皇相撲節事」など三句(※)を語った。御所の間でも平家語りを聞いた。二条殿・芝殿・塔頭比丘尼たち・惣得庵比丘尼たち大勢が聞いていた。田向三位・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・寿藏主らも聞いていた。名人であるだけに、とても素晴らしい、心に染み入るような語りであった。

私が聞いていることは秘密にしてあったのだが、検校は私が聞いていることを察したようだ。その分、心を込めて語ってくれたようだ。とても素晴らしい。夜更けに平家語りが終わってから、宮家に帰った。

新参女房・小今参の逃亡

さて新参女房の小今参が今日、宮家を出て行った。去年、出仕し始めたばかりの者である。宮家が経済的に苦しいので、たいしたお給料も出せなかった。それで、「母が来るので少しの間、会いに行きます」と言つて出て行ったきり、そのまま宮家を逃げ出してしまった。よろしくない事だ。宮家は経済的に苦しいので逃げ出されてしまったことは、仕方のないことである。

※国衙領(こくがりょう)：各国の国府の所領。公領ともいう。室町時代の国衙領は、既に国府が衰退しているので、荘園と同じような私領になっている。播磨国(兵庫県)の国衙領は、伏見宮家の領地。※「三句」：実際には四句ある。「高倉院紅葉御賞翫事」は平家物語巻六「紅葉」、「康頼入道疏黄鳥祝事」は巻二「康頼祝言」、「後鳥羽

院御位」は巻八「山門御幸」、「文徳天皇相撲節事」は巻八「名虎」に相当する。貞成は巻八中の一続きである「山門御幸」と「名虎」をまとめて一句と数えたのかもしれない。

十一日、太子堂の使者の僧が来た。筑前国赤馬荘のことで、いろいろと連絡してきた。その関連で、先日当方から差し上げた御経は弘法大師の直筆なので、お寺としても重宝であり、後の世からするとお手本で、今の世では名誉なことで、恐れ多くありがたいことずとお礼申してきた。

夜、十日に一度の雅楽練習会をした。一越調の曲を七つと朗詠などを練習した。長資朝臣も参加した。

奈良細工の団扇

十二日、晴。用健がいらっしゃった。団扇を一本下さった。奈良細工の作品だそう。すばらしい品である。

十三日、晴。聞くところによると、今日が故二条良基摂政の三十三回忌だそう。二条持基がいろいろと盛大な仏事を行ったそう。

十四日、晴。祇園会が行われたそう。そこで喧嘩が起きて、御神輿担ぎの者たちが大勢、刃物で切られたり殺されたりしたそう。

祇園山笠が朝廷や上皇御所へ参入

また朝廷や上皇御所にも山笠などが入ってきた。そのことで、朝廷の役人と上皇御所の役人との間で騒動があったらしい。

田向三位は太子堂に向かった。筑前国赤馬荘のことを申請書に載せるにあたって、詳しいことを指示に行ったのである。

十五日、晴。田向三位が帰ってきた。筑前国赤馬荘のことで、太子堂の僧たちと話し合ってきた。結局は、昔から太子堂に赤馬荘の租税

が寄付されてきたが、太子堂自身が課役徴収の実務にあたったことはないとのことだった。將軍による課役徴収のご命令がたら、太子堂としては訴訟も辞さないと言っている。しかし長老をないがしろにはできないので、結局、毎年、太子堂が課役を徴収するというやり方を停止して、改めて、赤馬荘の租税を宮家から寄付するという命令書をいただければ、お礼申し上げますと言われたそう。

しかし寺僧たちは、改めてその命令書を出していただくためのお礼はほんの少ししかできませんと言うので、それではダメだと田向三位は答えたそう。

ちょうどその時、西大寺の長老でもと住職が上洛して太子堂にいらつした。三位とは知人なので、この状況を詳しく長老に説明した。それで三位の主張の方が理に適っていると長老にはご理解いただいた。それで長老が寺僧たちを説得なさった。長老と寺僧との話し合いが数時間続いた後、結局は錢五十貫文のお札を宮家にお出ししますと言ってきた。この条件なら、そうそう反論することもないので、この線で決着させた。急いで正式な命令書を出しますと話しておいたそう。こちらが願っていた状況ではありませんでした。これで決着させて戻ってきましたと三位は報告した。仕方ないことである。

九条家領の河原水

さて日照りで伏見荘の用水も切迫してきたので、九条家領の河原水利用許可を領主の九条満教閥白に申請することにした。田向三位が使者として出かけていった。九条閥白側の返事は、方々から用水

利用を申請してきているので、大変な状況です。それで用水の利用法について規則を作ることになりましたとのことだった。しかし伏見宮家からは特別にご依頼いただいたので、用水利用については問題ありませんということだった。取り次ぎ役は、四位・五位の家司である唐橋在豊民部大輔だそう。前々も日照りの時に用水利用を申請したので、その先例に任せて連絡させたのである。

十六日、晴。こちらから頼んで、大光明寺の風呂に入れてもらった。その後、指月庵でしばらく休息した。すると瓜と干した強飯などをお寺が献上してきた。それを味わってから帰った。田向三位・重有・長資ら朝臣・慶寿丸らも一緒だった。

十七日、晴。勧修寺経興朝臣から初めて書状が届いた。播磨国国衙領の領地調査に関する証拠書類を選び出しておきなさいと勧修寺に命じておいた。

中右記

十八日、晴。勧修寺経興朝臣から返事が届いた。領地調査に関する証拠書類を選び出しておきますとのことだった。中右記が入った文書箱一箱を父・大通院の時代に勧修寺が申し出て借り出したままになったという。今まで返してこないの、取り返した。

筑前国赤馬荘課役の再寄付

十九日、晴。筑前国赤馬荘の件で正式な命令書と私の書状などを太子堂へ送った。正式書類は、重有朝臣が年番の執筆役なので、彼に書かせた。書類などは田向三位が持っていた。

正式書類

萩原殿直仁親王が特別に相続していた領地のうち筑前国赤馬荘の

件であるが、直仁親王から相続した領地は上皇の命令書に基づき、伏見宮家が実効支配していることに間違いはない。以前、速成就院に赤馬荘の課役を御寄付していたが、それをいったん停止する。そこで現在の伏見宮家当主として改めて御寄付するので、伏見宮家に対する特別な御祈禱をしない。以上のような内容の伏見宮のご命令が出されたところである。以上のようにご命令を取り次ぐ。

応永二十七年六月十九日

右中将重有 花押あり

速成就院住職

田向三位がすぐに帰ってきた。「正式な命令書と私の書状などは、将来にわたるまで寺家の指針として大事に致します。このことを長老は謹んで喜んでおります」という内容の返事があったそう。このお礼として銭五十貫文の一部が長老からすぐに届いた。田向三位には事務取扱者としての手数料として、この四分の一にあたる十二貫五百文を与えた。太子堂からもこれとは別にお礼があったという。

深草郷との用水争い

さて九条家に申請した用水利用に問題がないということなので、そのお礼をするため田向三位を九条家に行かせた。酒樽や川魚などを差し上げた。取り次ぎ役の唐橋在豊民部大輔にもお礼をした。

夜になって伏見荘の村人たちが用水を取ろうとしたら、深草の郷民が反対してきた。絶対に用水を取ってはならないと言い張っている。深草郷近隣の者たちも深草の郷民に同調し、甲冑を着て待ち構えていたので、伏見荘の村人たちは仕方なく帰ってきたそう。

このことを九条家へ通報したところ、醍醐寺三宝院から異論がで

て、三宝院主の命令で深草の郷民が取水を妨害しようだ。九条家からは「こうなれば大勢で押しかけて用水をお取りになられるべきでしょう。そうであれば、九条家からも伏見荘に加勢の人数をお出します」と連絡があった。

この件を皆と協議した。最近の情勢からして、弓矢をとって争うのはよろしくない事である。それなので、「力づくの争いは、不都合だと思えます」と九条関白家へ連絡した。そうしたら、九条家から「なるほど、その通りだと思います」という返事があった。「なんとか三宝院と話し合いますよ。その結果がでるまで、しばらくの間お待ちください」というように九条家から話があった。なんとかして暴力沙汰だけは避けたいものである。

二十日、晴。用水のことで、九条家司の唐橋在豊民部大輔から書状が来た。弓矢の暴力沙汰になることは外聞にしても実質的にも都合なので、醍醐寺三宝院に連絡しましたところ、深草郷民の暴力的な姿勢を三宝院はまったく関知していないそうです。「よくよく深草郷民に命令をして、用水取水に反対しないようにさせます」と三宝院から返事があったそうだ。「それで三宝院が深草郷に反対行為を強く制止したので、現在は取水に問題はないでしょう。急ぎ用水をお取り下さい」と九条関白も申していますという内容の書状だった。「ご仲介により無事に事が運んだことはいくら感謝しても、しきれません。喜んでおります」と返事しておいた。伏見荘の村人たちが今夜用水を取りにいったが、何も問題は起こらなかったそうだ。無事に済んで、めでたいことである。

太子堂長老のお礼、残りの銭が送られてきた。皆に配分して与え

た。

二十一日、晴。十日ごとの雅楽練習日なので、平調の曲七つと朗詠等を練習した。長資朝臣も練習に参加した。

重有朝臣は桜谷（※）へ参詣しに行った。

※「桜谷」：佐久奈度神社（滋賀県大津市）のことであろう。

二十二日、晴。赤馬荘のお礼の品で祝宴を開いた。また用水の取水が無事に済んだので、伏見荘の村人たちから祝い酒が献上された。伏見宮家の女性たち・芝殿・田向三位・重有・長資ら朝臣・寿蔵主・善基が祝宴に参加した。小川禅啓以下六・七人を私の御前に呼んで、酒を飲ませた。

赤馬荘のお礼の品を少し綾小路信俊前参議に送った。恐れ多く、ありがたいことでしたとの返事が来た。

北野天神の発句

二十五日、晴。北野天神が連歌の第一句を詠み、出雲大社の神が二の句を付けたと、ある人が夢で見たそうだ。それで、大勢の人が神が詠んだ第一句・第二句に続く句を付けて、奉納したそうだ。

幾千代の 松の色とや 朝日寺

宮造りする 雲の丈尺

宮家でもこの付け句の奉納をすることになった。宮家の男女に勧進の付け句を募った。連歌を知らない人は別の人に付け句をしてもらって、それに自分の名前を書いた。一献の酒宴の際に、皆が付け句を出した。善基が幹事となった。参加者はいつもの通りである。それに寿蔵主以下、村人たちも参加した。

今夜、京都の三条坊門あたりで数町にわたって火事があったそう

だ。

二十七日、晴。午後五時に大地震があつた。大地震の原因として、帝釈天が動いたようだ。

天狗の所行

また午後三時頃のことのようだが、火事もあつた。火事の現場は、北小路・油小路の交差点あたりらしい。天狗が京都市内を荒らし回っているようだ。

先日、中京あたりの民家四〇五軒で屋根に菖蒲が逆さまに刺さっていたことがあつたそうだ。これも天狗の仕業だろうか。

日照りは春日大明神の祟り

このところの日照りはただ事ではない。雨乞の御祈禱を行つても、その効果がない。春日大明神の御祟りだといううわさもある。

玉葉和歌集と風雅和歌集

さて芳徳庵主からお手紙がきた。それは、細川満元管領の意を重臣の安富が伝えた書状の内容を宮家に伝えたものであつた。その内容は、「勅撰和歌集二十代を書き写しています、玉葉和歌集と風雅和歌集だけは根拠となるお手本が見つかりません。この伏見宮御所には、根拠となるお手本があるそうなので、貸し出していただきたい。将来にいたるまで大事な証拠となるもので、お貸しいただければ一生涯に受けた最大の名誉だと心得ます」という、丁寧な申し出であつた。

こちらからは、「風雅和歌集の正本は、故御所様栄仁親王の御時に鹿苑院足利義満殿へ差し上げてしまいました。現在はそれ以外の本を宮家では持ち合わせておりません。玉葉和歌集は問題なく所持

しております。玉葉和歌集はこちらからお送りします」と返事をした。

二十九日、晴れていたが、夕方、にわか雨が降った。今夜から雨乞のため孔雀経法の法会が行われるそうだ。導師は醍醐寺三宝院主だというが、訴訟事があつて、そうなるかどうかは未定のようだ。

空から鮒が降る

さて室町殿に仕える女房の部屋に、空から鮒が降ってきたという。不思議なことである。このことを陰陽師は火事が起こる前兆と占つたそうだ。この女房は、洞院家の娘で西御方という人。その後、この女房は室町殿のご意向に背いたので、尼になられたという。鮒が降ってきたのは、所詮、この女房自身に対する怪異だったのだろう。三十日、晴。いつものように風呂に入つた。綾小路信俊前参議が来て、六月祓の茅輪を作つてきてくれた。このことは近年、良い先例として綾小路に勤めてもらつてゐる。一献の酒宴をした。これは綾小路前参議が用意してくれた。田向三位以下が参加した。

伏見宮家の玉葉和歌集は門外不出

さて伏見宮家が所持している玉葉和歌集は先祖代々秘蔵している御本なので、他所に持ち出すことはできない。それで今出川家が所持している本三帖を借用した。これで問題なく、細川家に貸し出すことができる。

七月一日、空は晴れている。「初秋の良い時節だ。良い兆しがあり、すべてがとても幸せだ」と予祝した。いつものように月初めのお祝いをした。

さて今出川公行前左大臣が只拍子の甘州の秘説に関して、箏の説

はあるのかどうか疑問だと仰るので、楽譜一紙を送った。「私は師匠から聞いているので、秘説を知っています」と返事をした。今出川前左大臣は少し加減が悪く、身体の自由が利かないらしい。それでお見舞いとして川魚も送った。

今日は十日に一度の雅楽練習会の日である。綾小路前参議や長資朝臣らが練習に参加した。楽拍子の万歳楽・三台急・甘州・春揚柳・太平楽急・勇勝急・五常楽急に朗詠などをした。

二日、晴れていたが、昼に雨が降った。秘曲の万秋楽を演奏した。綾小路前参議が笛で合奏してくれた。ただし綾小路は暗譜していたいくつかの帖を忘れていた。それで序・破の二帖だけ合奏した。

夏の修行期間中、毎日、万秋楽を弾いていた。それで夏の最終日に合奏しようと思っていたが、綾小路は暗譜していた笛のパートを忘れてしまった。それに豊原郷秋は腹痛で宮家に来られないので、合奏できない。残念だ。

朗詠の布政之庭（※）をまだ伝授されていないので、練習した。数回、歌ってみた。その後、盤渉調の曲を二つ三つ演奏した。

夜にまた音楽会をした。双調の鳥破・鳥急・颯踏入破・賀殿急・胡飲酒破・陵王破と朗詠などをした。綾小路前参議と長資朝臣が参加した。

さて今出川家の玉葉和歌集三帖を芳徳庵主に送った。すぐに直接細川管領家に伝え送ったという。もしかしたら、安富が私的に申し出たことなのかもしれない。不審である。

※布政之庭：『和漢朗詠集』帝王六六〇。
三日、晴。指月庵へ行った。指月庵には用健がいらっしゃるので、軽

食を持参した。寿蔵主を食事会の準備担当者にした。大光明寺長老をお呼びしようと用健が仲立ちしてくれたので、すぐに長老の文鼎和尚がいらっしゃった。すぐに食事会となった。綾小路前参議・田向三位・重有朝臣もお相伴で同席した。お茶を飲み終わって、長老は座を立った。長老は羅茶（※）を一袋、献上してくれた。長老は時々この羅茶を献上してくれるので、うれしい。

その後、南面の間で、秘かにお酒を飲んだ。事が終わってすぐに帰った。

帰ってすぐに音楽の練習をした。万秋楽序・十二拍子の蘇合序、それに「十方仏土中、以西方為望」（※）という朗詠を習った。

綾小路前参議はこの春に中風が再発して以後、身体の自由が利かないので、雅楽の曲を数多く吹くのは難しいということだ。それで休んでもらった。ああ、綾小路卿が存命の間音楽の練習をしなれば、いったい誰が私を指導してくれるだろうか。綾小路卿の老衰が惜しまれるし、悲しい、悲しい。

夜に入って、また音楽会をした。桃李花・喜春楽序・喜春楽破・河南浦・海青楽・平蛮楽・拾翠楽と朗詠などをした。長資朝臣も参加した。長資は朝廷の小番には行かなかった。

※羅茶（らっちゃ）：茶・甘草などの漢方生薬に香木を混ぜて丸状にした酔い覚ましの薬。蠟茶。橋本素子氏のご教示による。

※十方仏土中、以西方為望：『和漢朗詠集』仏事五九〇。

船に乗る会

四日、晴れていたが、少し風が吹いた。船に乗る会を実施した。田向三位にこの会の幹事をさせた。まず指月庵に行った。船の屋形など

が出来上がるまで、ここで待機した。

午後一時に東津から船に乗った。亡き兄の妻であった上臈・私の妻である二条殿・今参・綾小路前参議・綾小路三位（田向経良）・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・阿古丸・聖乗・梵祐・惣得ら稚児・女官の目目らが船に乗った。小川禅啓・行光・広時ら村人たち数人も乗った。

まず川東へ漕ぎ上げ、同伴している漁船から網が投げられた。その間、一献の酒宴や音楽会などをした。楽拍子の採桑老を演奏した。笛を綾小路前参議、笙を田向三位と長資朝臣、琵琶を私が演奏した。

包丁式

曲が終わって、漁師が簀巻きから網を引き上げたが、魚はまったく懸かっていなかった。また網を置いた。今度は魚が数多く懸かった。とても面白かった。広時が包丁式で魚をさばいた。

一献の酒宴をしながら、また音楽を奏でた。蘇合急・万秋楽破・残楽（のこりがく）で青海波を演奏した。そして翠帳紅閨・新豊酒色（※）という朗詠をした。この朗詠には伴奏を付けた。伴奏の笛は綾小路前参議、笙を田向三位、朗詠（※）は私と長資朝臣が歌った。

その後、川西の方へ漕ぎ下り、また網を引いた。魚が多数懸かった。とても感動した。酒宴も数献に及び、自他共に酔った。音曲や雑芸などを詠った。日が既に暮れたので、棹を差して帰り、東津に着岸した。この帰りの船上で、千秋楽を五回吹いた。曲が終わった時、ちょうど船は着岸した。船から降りて、宮家へ帰った。

船楽（ふながく）

宮家の女性たちや留守番をしていた人たちに、お土産として川魚

を振る舞った。そしてまた一献の酒宴があった。綾小路前参議が伏見宮家にいるので、船楽として、この船に乗る会を実施したのである。納涼も兼ねており、たいへん面白かった。

伏見荘と木幡郷の草刈り相論

さて伏見荘と木幡郷の間で草刈りに関する争いが、この前から起こっている。今日、木幡郷が境界の目印を小縄手の西に付けた。これは草刈りの争いとなっている場所を越えて伏見荘側に入り込んだものだそうだ。それで伏見荘の村人たちは、弓矢を取って戦おうと言っている。

それに対して、「何とかして將軍へ訴えるので、軽はずみな行動をしてはいけない。將軍の裁決がでるまで待ちなさい」と村人たちに知らせるよう、小川禅啓を呼び出して命じておいた。この件で田向三位に、明日京都で出かけるように命じた。幕府あての訴状を書いた。

※翠帳紅閨：『和漢朗詠集』遊女七二〇。

※新豊酒色：『和漢朗詠集』酒四七九。

※「朗詠」：原文には「音曲」とある。

五日、晴。田向三位が京へ出かけた。木幡郷との境界争いのことで、訴訟書類などを整えて、持っていった。木幡郷は聖護院が支配しているのので、まず聖護院門跡へ出かけて、「無事に済むように、木幡郷現地にご命令下さい」と申し入れさせた。

綾小路前参議が帰っていった。ここ数日、伏見に滞在して宮家に仕えてくれた。とてもうれしかった。

六日、晴。田向三位が帰ってきた。聖護院へ行ったところ、このとこ

る院主は鹿谷にいらっしゃるという。それで鹿谷に行つて面会し、境界争いの状況を詳しく説明した。

そうしたら、院主は「將軍へは通報しないで下さい。こちらで処理します。今日・明日の間は待つていて下さい」と仰つた。「でも一刻を争うことなので、今すぐ將軍の所へ行かなければなりません」と田向三位が返事をした。しかし、再三「待つて下さい」と言われたので、「明日中にご決定内容をお伺いします」と言つて、歸つてきたという。

さて上皇御所の御花合わせに今出川公行前左大臣が花瓶一つを献上するそう。そのために草花やお盆をお借りしたいというので、花を一筒と堆朱の小盆を探し出して、今出川家に送つてやつた。

七夕花合わせ

七日、晴。朝早くいつものように梶の葉に和歌を書いた。花合わせのため、決まり通りに座敷を飾つた。客殿と常の御所の間の障子を取り払つた。屏風を立て廻して、中国風の絵七幅を屏風に懸けた。置き戸棚や机を立て並べて、その上にいろいろな飾り物をのせた。花瓶を十五個立てた。琵琶・箏・笛・笙・太鼓などの楽器を立て並べた。座敷の飾りはだいたい以上のような感じである。

生け花の花瓶十五個は以下の通りである。私の分は花瓶三つで、青銅製の一斗杓・茶碗形の酒器・太鼓形の鉢である。綾小路三位（田向経良）は花瓶一つで、青銅製のお盆と鼈甲製のお盆にのせてある。重有朝臣は青銅製の花瓶一つに同じく青銅製のお盆。長資朝臣も青銅製の花瓶一つに青銅製のお盆。善基は青銅製の花瓶一つに香台。光台寺住職は青銅製の花瓶一つ。これは鶴頭と呼ばれる杓立てを花

瓶にしたものである。玄忠房は銅に金メッキをした花瓶一つ。行光は青銅製の花瓶に鼈甲製のお盆。小川禅啓は青銅製の花瓶一つに同じく青銅製のお盆。広時も同じく青銅製の花瓶一つと青銅製のお盆。小川有善も同じく青銅製の花瓶一つと青銅製のお盆。浅野康知は青銅製の花瓶一つ。宝泉は青銅製の花瓶に堆朱で作つた菱形のお盆。宝泉はこの他に、本尊の中国風絵画・毛織りの敷物一枚・いろいろな置物や屏風などを献上してきた。

まず大光明寺にお参りした。田向三位・重有朝臣・長資朝臣を連れて行つた。ちようどお経を読んでいる最中だったので、参列席に入つた。お経が終わつてから焼香した。長老と対面してからすぐに歸つて、風呂に入つた。その後、いつものように御節供のお祝いをした。その場で和歌を七首詠んで、懷紙に書いて皆に披露した。

次に音楽会をした。採桑老・蘇合急・白柱・輪台・青海波・竹林楽・越殿楽・千秋楽、そして二星適逢（※）という朗詠などをした。音楽会には長資朝臣も参加した。人が居なかつたが、決まり通りに音楽の奉納を終えた。

上皇御所でもいつも通りに音楽会と花合わせが行われたそう。それに今出川公行前左大臣と綾小路前参議も参加したという。

境界争いで取つた鎌を返させる

さて聖護院主から書状がきた。伏見荘と木幡郷の間の境界争いについて、穩便に伏見荘村人の鎌を返すように、木幡修行の許へ書状を書き与えたそう。その書状の写しも付けて寄こした。

境界がまだ決まっていけないのに鎌を返すというのでは不十分なので、この書状を受け取らずに先方へ返した。

後で聞いたことだが、今夜、京都の転法輪京極で火事があり、土蔵が焼けたそうさ。

※二星適逢：『和漢朗詠集』秋二二三。

八日、晴。用健がいちゃって、花合わせの花を一通りご覧になった。

ところで聞くところによると、上皇御所の御花合わせに花七十七瓶集まったそうさ。音楽会では、平調の慶雲楽・万歳楽・甘州・夜半楽・五常楽急・郎君子・林歌などが演奏された。

さて今出川公行前左大臣が勤める琵琶の役を上皇様が藤原孝長朝臣にお命じになったところ、「前回は上皇様の特別なご命令として二度お勤めしました。しかし今回はもう、ご命令には従えません」と孝長は断ったそうさ。しかしそれでは困るので、孝長に琵琶の役を勤めなさいと再三お命じになったが、それでもなお差し障りがありませんと孝長は言い切ったそうさ。それでは孝長はお勤めしなくてよいと仰って、上皇様はご退出されたそうさ。今出川前左大臣としては名誉なことである。大臣や四位殿上人の所役は、先例としてずっと固定して続けられるものである。そのことを上皇様がご存じないとは、おかしい話である。

御連歌会での上皇様の最初の句

松ならぬ 梶にも添うか 手向け草

また聞いたところによると、石橋満博の七夕連歌の最初の句

さお鹿の 星の逢う夜や ともし妻

連歌師どもの句は素晴らしいとお褒めになったそうさ。

四条聖

また四条聖の最初の句

梶の葉に また七草の 花もがな

これも素晴らしいと仰ったそうさ。それでもなお、石橋の最初の句は珍しく面白いものであろう。

神泉苑で雨乞読経

さて雨乞のため神泉苑で孔雀経の御読経が行われたそうさ。導師は真光院僧正だという。今回の読経の導師を勤めさせるため、真光院主を僧正に任命したそうさ。仁和寺御室御所がこの読経をお取り扱いなさっているのだ、お伴の僧三十人を御室のご門徒からお出しになったそうさ。祐誓僧都も相応院からお伴の僧として出されたそうさ。

日照りは貴船大明神の祟り

神泉苑ではいろいろな怪異があったらしい。しかし、雨は降らなかった。今回の日照りは貴船大明神の御祟りらしい。

石清水八幡宮安居会の松拍

九日、晴。石清水八幡宮の安居会の当番である蔵光庵主が、約十メートルの野生の松が欲しいと言って切り出しにきた。松囃子があつた。山の松を切り出す道すがら、御所へ来たのである。派手な飾りはないが、見事な出で立ちであつた。乱舞をしたら、すぐに出ていった。褒美を与えるべきでしょうと皆が言うので、また呼び返した。それで帷子を一つ与えた。

この松は、安居会に用いる木だという。当番の囃子手は、京都の町人だそうさ。当番の神人はまた五条坊門の材木商人でもあるという。明け方に石清水八幡宮から来て、船に乗って材木を引いていくそうさ。

夕方に花合わせの座敷飾りを少しかたづけた。孟蘭盆経を読み始めた。

十日、晴。太子堂から使者として、年番の事務担当僧である観智が来た。お札の銭二十貫文の残りを持って来たのである。喜ばしいことだ。

殿上での茶会を、最近、宮家の男どもが行っている。今日で当番の役は一巡したそうだ。毎回、茶会のたびに、私のところへ献茶をしてくる。私も宮家当主として、大きな酒の壺を与えている。宮家の女性たちも同じように酒を出しているようだ。侍臣たちだけでなく、村人たちも大勢集まっているようだ。

十一日、晴。伏見荘と木幡郷の境界争いの中で、小川有善を使者にして木幡修行に連絡させた。そうしたら丁寧な返事が来た。和談になる様子である。

十日に一度の雅楽練習会をした。黄鐘調の曲を二つ三つと朗詠などをした。長資朝臣も参加した。

十二日、晴れていたが、夕立が少し降った。権野寺主がいらっしゃった。大光明寺へ御焼香しにお参りするそうだ。そしてすぐに自分の寺へ帰っていった。観娘と一緒に子供してきた。

寿蔵主が酒樽を一つもって来た。それで、酒を飲んだ。

月蝕

十四日、晴。月蝕である。午後九時から午後十一時まで月蝕だった。

孟蘭盆に御供えする水のこと、生島明盛がやってきた。いつものように明盛に御供えの水に関する事務取扱をさせた。

十五日、晴。いつものようにお経を読んだ。その後、お墓参りをした。昼に蓮飯をお供えて、食べた。宮家の女性たちや芝殿、田向三位

以下も一緒に食べた。

大光明寺へお参りして、施餓鬼に参列した。まず仏殿で焼香し、次いでお墓に水を手向けた。山門右脇の参列席に、東御方・廊御方・上臈・二条殿・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸らと座った。施餓鬼の僧は三十八人だった。夕方に参列しておえて、帰った。いつもように石井・船津・山村の念仏お囃子行列が来た。

さて後で聞いたことによると、紫野寺の長老が施餓鬼の最中に思いがけなく殺されたそうだ。敵か盗人かが殺害したのだが、それが誰だかは分からないそうだ。

相国寺喝食の飛礫が足利義持の烏帽子に当たる

また相国寺で施餓鬼の最中に稚児数人が石を投げ合った。その石が室町殿の烏帽子に当たった。それで稚児は全員追い出されたそうだ。

十七日、晴。先頃、新築していた田向家の書院や押し板などが完成した。それで拙宅をご覧下さいと招待された。私・子供たち・侍女・男どもが出かけた。宮家の者ほとんどが見に行った。惣得庵御寮・明元・稚児たちも同じく来た。座敷を少し飾ってあった。一献の酒が何度も廻った。酒宴が丁寧な準備されており、賑わった。村人たちも来ていた。乱舞などをして、とても楽しかった。私はとても酔ってしまった。即興で和歌を詠む会をすることになり、面白かった。夕方に酒宴が終わって、帰った。

さて室町殿への八朔の贈答は、全国が飢饉なので、中止なされた。状況がよく分からないので、清原常宗に内々に尋ねてみた。天皇陛下、上皇様や摂関家はいつも通りである。その他の贈答は止めさせ

た。室町殿へも贈答をしてはならない。さて、こちらからの進物はどうしたらよいだろうか。誰かにさらにお尋ねになってはいかがでしょうかと常宗は言ってきた。

十八日、晴。広橋から書状があった。木幡郷との境界争いに関してお尋ねしたいことがあるという。早速、田向三位を行かせた。私の手紙や関係する書類なども持たせた。

敵方の木幡郷から一方的に幕府へ訴えたのであろうか。当方から訴えるべきであつたが、とかくいろいろあつて遅くなつてしまった。残念なことだ。

万秋楽秘曲の奉納

十九日、晴。夜になつてにわか雨が降り、雷が鳴った。さて夏の修行期間中、万秋楽の秘曲を練習していた。今日はその練習の最終日である。少しでも合奏の形に整えたかつたので、綾小路信俊前参議と豊原郷秋を呼んだ。それで綾小路前参議は来てくれたが、郷秋はお腹の病気が再発したとかで来なかつた。人が居ないのは残念なことである。音楽会には綾小路前参議と長資朝臣が参加した。客殿に先祖代々のご本尊である妙音天の画像を懸けた。その前に机を一脚置き、お供物、お香やお花を供えた。

開始時間になつて、席に着いた。綾小路前参議と長資朝臣も席に着いた。綾小路前参議が盤渉調の調子を吹いた。次に採桑老、次に万秋楽序、次に万秋楽破六帖。

綾小路前参議が六帖のいくつかを忘れてしまったと言い、二帖から笛を省略した。長資朝臣には伝授したが、まだ暗譜していない。そのため二帖からは私一人で演奏することになった。面々の合奏を

期待していたのに、残念なことだ。しかし、とにかく無事に最後まで弾くことができた。

次に蘇合破急・琵琶だけを残楽にした白柱・輪台・残楽にした青海波。次に朗詠。朗詠の第一回・第二回は私が伴奏を弾いた。第二回の時、綾小路前参議が笛を付けた。最後に残楽の千秋楽。音楽会が終わつて、妙音天像に焼香した。綾小路前参議も同じく焼香してから退室した。その後、特に一献の酒宴をした。

夏の修行期間中、毎朝、身を浄めて琵琶を弾いた。一日たりとも欠かさなかつた。そして無事に練習をやり遂げた。妙音天への奉納といい、私の練習といい、いずれもこうしようと思ひ企てていたところ、こうして無事にやり遂げることができた。まずは自分をとても褒めてあげたい。

綾小路家相伝の朗詠

二十日、晴。いつものように身を浄めた。夕方に音楽会をした。高麗楽の退走徳・崑崙破急・納曾利・長保楽急・朗詠などをした。綾小路前参議一人だけが参加した。

朗詠の可憎病鵠(※)を習った。この朗詠は善統親王から伝えられたものである。綾小路信有中納言入道が善統親王にこの朗詠を習った。それ以来、この朗詠は綾小路家に伝えられているのだ。秘曲ではないが、特別に伝えられているので、何となく大切にしているのだそうだ。

広橋は木幡郷を最負

夜に田向三位が帰ってきた。境界争いについて、広橋は木幡郷からの訴えを詳細に話してくれたそうだ。証拠となる差図が提出され

ているので、伏見莊側の証拠も見て話し合いたいという。

所詮、広橋は敵方の木幡郷を贖負しているのである。広橋家の侍である和泉守が訴人として広橋に説明したらしい。もしかしたら和泉守は木幡郷と関わりがある者かもしれない。

決着すれば、將軍からご裁断があるので、明日、室町殿御所へ田向三位が行くことになる。広橋も室町殿の御所で落ち合つて、取り次ぎをする約束してくれた。

翌日の早朝、田向三位は室町殿のところに行つた。広橋を待つていたが、やってこない。使者を走らせて尋ねたところ、昨晩は上皇御所へ行き、ひどく酔つ払つてしまったので、行くことができないそうだ。

畠山満家の取り次ぎ

しかたなく戻ろうとしたところ、畠山満家左衛門督と出会つた。それで軽く挨拶をして、畠山に事の次第を詳しく説明した。そしてなんとかお取り次ぎくださいとお願ひしたら、仕方なく了承してくれた。そしてすぐに取り次いでくれた。室町殿のご返事は畠山満元管領から事務担当者を通してお伝えしますとのことだった。それで、管領のところへ行つて、このことを説明した。管領はすぐに事務取扱者の飯尾清藤加賀守に命令しておくと言われた。それでさらに飯尾加賀守のところへ行き、この事を説明した。飯尾は関係書類を見て、心得ましたと言つたそうだ。明後日、將軍へお伝えしますというので、帰ってきたという。あちこち飛び回つて、気疲れしましたと田向三位は言つていた。畠山が取り次いでくれた芳志はとてもありがたうれしかったとも言つていた。

さて室町殿への八朔の贈答は、一律に禁止というわけではなく、相手によって考慮するというところらしい。この伏見宮家御所については、むしろ室町殿の方から贈答品を差し上げるべきところ、宮家から贈答品を頂いているので、今年はお贈り下さらなくてけっこうですとのことで、広橋から詳しく説明して宮家からの八朔を止めたことのことであつた。このうへは、宮家からの八朔贈答は遠慮なさるべきでしょうと広橋は言つていたそうだ。清原常宗にも尋ねたところ、遠慮なさるべきでしようと言つたそうだ。お祝い事なので、いちおう了承したが、贈答品を省略すべきかどうかは考え物である。

※可憎病鶴：『新撰朗詠集』恋七三二。

二十一日、晴。十日ごとに行つてゐる雅楽の練習会で、一越調の回盃・鳥急・颯踏入破・賀殿急・朗詠の一声鳳管（※）・胡飲酒破・陵王破をした。また地久破急などもした。練習会には綾小路前参議と長資朝臣も参加した。

室町殿への八朔贈答について、今出川公行に相談した。広橋に対して「重ねて室町殿のお考えを伺いなさい」と私から命令なさるのがよいのではという意見であつた。これでよいだろうか。

※一声鳳管：『和漢朗詠集』管弦四六二。

二十二日、晴。夕方に雨が降つた。綾小路信俊前参議が帰つていった。「八朔の贈答は祝儀であるので、格別のこととしてお贈りしたいと思ひます。お許しただけでないでしょうかと室町殿へお伺ひして下さい」という内容の書状を広橋へ送つた。

二十三日、曇つたり晴れたり落ち着かなかつた。田向三位が京都へ出かけた。幕府の事務取扱者である飯尾清藤の方へ酒一献分の銭を

持っていた。広橋には酒樽なども渡した。田向三位はそのまま京都に逗留して、書状で連絡してきた。室町殿は今日から北野天満宮へお籠もりになる。それで事務取扱者から室町殿へご連絡することはできないということだった。

広橋のところへ行つて相談したところ、やはり敵方に通じているようで、木幡郷を賈負する様子がうかがえた。広橋は、伏見荘側のことを取り上げるかどうか明言できないと言ったそう。

明日は木幡の六地藏詣でなので、敵の木幡郷は大勢を引き連れて合戦をする用意ができていられるらしい。伏見荘側からも弓矢を取つて境界の地を奪い取るとの噂があるそう。伏見荘の村々では弓矢を取る準備などではない。巷の根も葉もない噂はよろしくないことだ。

さて八朔の贈答については、八朔を受け取る人数と停止する人数は室町殿がお決めになっているので、この伏見宮御所のことを重ねてお伺いすることは難しいと広橋が言ってきた。ご遠慮下さいとも言っている。この上は仕方がない。室町殿若君に対しても同じく贈答停止ということらしい。

月庭の法華経談義

二十四日、夜に大雨が降った。明け方には大風が吹いており、朝になつてもなお吹き止まなかった。さて法安寺にある学問僧が来ているそう。曹洞宗の僧で、道号を月庭といい、淀に住んでいる人らしい。その月庭が今日から法華経の講義を始めるそう。ご聴講してはいかがですかと法安寺から連絡してきた。私はまだ法華経の講義を聞いたことがなかったので、すぐに了承した。お忍びで聴きに行つ

た。宮家の女性たち、東御方・廊御方・二条局、そして重有朝臣・慶寿丸たちも聴きに行った。

薬師堂の東第一間が聴講席となっていた。塔頭御寮惠芳・香雲庵主・真幸・惣得庵御寮・尼五く六人・瑛侍者・具侍者・宮家の局女らも大勢、聴講席に詰めかけていた。

本尊の薬師如来像の左脇に椅子が置かれ、金欄の裂(きれ)が懸けられていた。その前に机が一脚立てられている。机には敷物が敷かれ、金欄の幕が掛かっていた。机の上には、紺紙の表紙の法華経一部・警策(※)・花瓶・香炉・香箱などが置かれている。

開始時刻になつて、学問僧が入座して、椅子に座った。侍者一人と稚児一人も着座した。まず観音経一卷を読んだ。次に説法をした。妙法蓮華経という表題について二時間ほど説いた。弁説は湧くようになめらかで、神妙であつた。説法が終わつて、大悲呪一卷を読み終えて、座を立った。

薬師堂の西の部屋二間に御簾を懸け、楊柳寺・蒼玉庵の尼や女性たちが聴講していた。本尊の前、左脇にも南側と西側に青い簾を懸けて、宮家の人々・局女・女官・尼たちの席とした。薬師堂本尊の後ろを、光台寺の僧たちや村の男どもの席とした。御堂の正面には畳を敷き、寺庵僧の席とした。礼堂には大勢の人々が群れ集まっていた。夕方に講義は終わった。

周郷(周具)の就職

【頭書】(日記の上方の隙間に書き加えた記事) 田向経良の息子である周郷は周具と改名した。万寿寺で修行中の焼香侍者に招かれたそう。夏の修行期間が終わつたら、万寿寺に参りますと言っていた。

※警策（きょうさく）…禅宗寺院で用いる扁平な木の棒。座禅中、眠気に襲われた修行者を打つもの。けいさく。原文では「経尺」と書かれている。

二十五日、晴。朝早く御香宮へ参詣した。重有朝臣と慶寿丸と連れて行った。護念寺の尼二人と会った。この二人は惣得庵に來ている客人だそう。ちょうど都合の悪い時で連れのが少なく、恥ずかしい思いをした。

さて田向三位が帰ってきた。木幡郷との境界争いのこと、幕府の事務取扱者が北野天満宮に出かけ、昨日、室町殿にお伺いしたところ、「お経を読んでいる最中は書類などのことを詳しく聞いている訳にはいかない。追って命令をするので、先走ったことをしてはならない」との仰せだったそう。先日、広橋がお伺いしたときも同じような趣の仰せだったそう。室町殿はお籠もりしている最中なので、こうした訴えを不快に思っているらしいのだろうか。木幡郷・伏見荘の両方の動きが止められるのであれば、当方としては元通りであり、問題はないのであるが。

毎月恒例の連歌会を重有朝臣がいつものように当番として準備をした。冷泉正永が来た。その他はいつもの参加者だった。

二十六日、晴。昼に雨が降った。法安寺へ行った。田向三位・重有朝臣・長資朝臣・冷泉正永らも行った。東御方・廊御方・田向三位の妹である玄経・香雲庵主・真幸・伏見宮家の局女らも同じく行った。堂の前の座席に、大光明寺・蔵光庵・行蔵庵・退蔵庵・即成院の僧たちが大勢座っていた。礼堂には大勢の人が群れ集まっていた。説法は数時間続いた。心からとてもありがたく感じた。夕方には聴講

が終わって、帰った。

竜山の法華経談義

さて御香宮御旅所である新堂には、旅の学問僧が宿泊している。曹洞宗の学問僧で、道号を竜山というそう。この竜山も今日から法華経の説法を始めることに決まったそう。法安寺に滞在している学問僧と張り合うつもりらしい。

法安寺の学問僧については、あらかじめ村々に説法があることを周知させていた。法安寺を説法場所に用いて、大勢が聴講した。新堂の学問僧についてはこれまで何も聞かされておらず、見たこともない。しばらく宿泊しているただの乞食坊主である。法安寺の学問僧と張り合おうとするなど、よろしくないことだ。弁舌もたいしたことがないらしい。それでもよいとして、近所の村人たちは聴講しているらしい。

二十七日、晴。冷泉正永が帰っていった。風呂に入った。その後、法安寺へ行った。田向三位・重有・長資ら朝臣たちも行った。伏見宮家の女性たちは行かなかった。惣得庵主や山田の香雲庵主は来た。寺庵の僧たちも大勢座っていた。いつものように説法があった。

二十八日、晴。昼にわか雨が降った。取り乱していたので、私は説法の聴講には行けなかった。伏見宮家の女性たち、東御方・上臈や塔頭御寮恵芳・田向三位・重有・長資ら朝臣は行った。今日の聴衆はさらに大勢が群れ集まったそう。新堂の法華経講義も、宮家の男どもは聴講してきた。弁舌は未熟だったと男どもは話していた。二十九日、晴。八朔贈答品の準備にかかりつきりだった。法安寺へは、東御方・玄経・重有朝臣・局女・女官らが行ってきた。用健の老母

である宝珠庵主や惣得庵主・山田香雲庵主らも来たそうだ。思うところがあつて、毎日、聴講している者を記録している。つまらないことだ。

八月一日、昨夜から雨風が烈しい。朝になって、風は少し止んだ。しかし雨はなお降っていた。昼には晴れた。

今日は日蝕である。午前十一時から午後五時まで日蝕のはずだったが、雨のせいで分からなかった。

早朝に後小松上皇様宛ての八朔贈答品、竹の枝で飾った燭台一對・地紋が雲で蝶が打ちつけてある銚子提・引合紙三十帖をいつものように冷泉永基朝臣を通して進上した。室町殿への進物はとりやめた。聞くところによると、仁和寺御室や妙法院主、その他、室町殿の親族である門跡寺院主や九条満教閑白、徳大寺公俊・二条持基・西園寺実永の三大臣以下、室町殿近習の公卿や殿上人は進物を献上したそうだ。外様の皇族や諸門跡寺院主・諸家武家（この内、何人かは進物を許容されたい）・室町殿に仕える女房等からの進物は中止になさった。一律に進物停止ではなく、家によって用捨なされたようだ。

この伏見宮家御所は代々將軍家に進物を出している。しかし今年は見所のない私が当主であることに、今更ながら恨めしい思いである。今出川家からは、室町殿へ進物を贈ることができて、名誉なことですと言ってきた。宮家の男女からはいつものように礼物が献上された。今出川家の人々からの進物もいつもの通りであった。今出川公行前左大臣にはすぐにお返しに長櫃一合を送った。椎野寺主・勧修寺経興朝臣・冷泉正永からもいつものように進物があった。

三条公光大納言・葉室宗豊朝臣からは進物がなかった。これは全国的に進物停止の法を守ったからなのであるうか。それとも自分勝手に（※）ただ送らなかつただけかもしれない

さて慌ただしかつたので法安寺へ行ってなかつたところ、「今日は大事な箇所（箇所）の講義です。ご聴講に来て下さい」と法安寺から連絡があった。それで、急に行くことにした。宮家の女性、東御方・上臈・二条殿・塔頭御寮惠芳、田向三位・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・今回初めて聴講する寿蔵主・稚児の聖乗らも行った。惣得庵主や山田香雲庵主はいつもの通りである。法華経方便品十如是の説法が数時間行われた。とてもありがたく感じた。夕方に講義が終わって帰った。

田向三位が八朔の進物として一献の酒宴でお祝いしてくれた。この一献の酒宴は毎年の良い例となっている。

※「自分勝手に」…原文では「次求之儀歟」とある。「次求」を「恣」の誤記または誤読とみなした。

廊御方の二日御憑み酒宴

二日、曇りで、夕方に小雨が降った。一献の酒宴があった。これは、廊御方恒例の二日御憑み贈答によるものである。

法安寺へは行かなかつた。宮家の女性たちも行かなかつた。塔頭御寮惠芳・田向三位妹の玄経・芝殿・重有朝臣・長資朝臣・宮家の女官である賀々らが法安寺へ行ったようだ。

三日、昨夜より大雨が降っていたが、朝になって晴れた。相応院主弘助法親王様への御憑み贈答で、銚子提・杉原紙十帖をお贈りした。それにさきがけて相応院門跡から、銚子提・引合紙十帖をいただきたい

た。お互いに同じ物を贈答し合っており、自ずから同じ心持ちでいたことが面白い。三日御憑みの贈答をお祝いした。

祐譽僧都からも御憑みの進物があつた。今出川公行前左大臣からいつものように二日・三日の御憑みの進物があつた。冷泉永基朝臣からも進物があつた。毎年この日に贈答するのが良い例となっている。

法安寺へ東御方・廊御方・塔頭御寮恵芳・田向三位・重有朝臣・局女・女官の女々らが行つた。夜にまた新堂での説法があり、宮家の女性たちや重有朝臣が聴きに行つた。

さて室町殿が今夜、上皇御所へ参上したそう。来たる十日、後小松上皇様が嵯峨へ行かれることの準備だという。お供する公卿や殿上人を内々にお選びになつたらしい。

四日、晴。保安寺へ行つた。田向三位・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸を連れて行つた。宮家の女性たち、東御方・廊御方・塔頭御寮恵芳・二人の局女・女官の賀々々も行つた。山田香雲庵主や惣得庵主ら大勢も詰めかけた。説法はすばらしかった。講義は終わって、法華經第一品を皆一緒に音読した。聴衆の僧たちも同じく音読した。その後、法華經第二品についての説法が始まつた。この二三日の講義はこういう形で行われているようだ。

説法での飲酒

さて聴講している間、寺家から酒が献上されてきた。聴講の場でその酒を飲んだ。よくないことであろう。仏法を聞く場所での飲酒は罪業である。

さて田向家が新築されてから今まで、家を見ることを怠っていた。

それで明後日、新築祝いの志を示そうと思う。それで、祝儀として酒一献分の錢を記した贈呈目録、その他、酒樽や肴などを田向家へ送つた。「思いがけず、ありがとうございます。うれしく存じます」との返事だった。

五日、晴。法安寺へ行つた。重有・長資ら朝臣を連れて行つた。東御方・上臈・二条殿・塔頭御寮恵芳・女官の目々々も行つた。惣得庵主や山田香雲庵主もいつも通り来ていた。今日で、一卷分の説法が終わる。

さて典侍局からの御憑み進物が届いた。どうしてこんなに遅れたのだろうか。

鱸の包丁式

六日、晴。田向家へ行つた。子供たちや宮家の女性たち、およそ宮家の男女全員が田向家へ行つた。一献の酒宴が丁寧に着意されていた。三献の時、私の御前で広時がスズキをさばく包丁式を試みせた。一説によると、その切りさばき方は、お祝いの時のものであるようだ。広時には扇を与えた。

酒宴は数献に及んだ。いつものように朗詠や音曲、乱舞が行われた。小川禅啓以下、村の長老たちを私の御前に呼び、酒を与えた。夕方に酒宴が終わって帰つた。今日の儀式は、私が主催したものである。田向家は特に恐縮していた。

法安寺へ重有朝臣が少しの間だけ、出かけたそう。

牛飼いの孫石丸・孫有丸

七日、晴。牛飼いの孫石丸と孫有丸が来た。孫有丸は、孫石丸の嫡子だそう。孫有丸は宮家にはじめて来た。重有朝臣が取り次いで、

二人と対面した。御扇を各々に与えた。すぐに出ていった。孫石丸はこの三年間宮家に仕えている。古くからの好を大事に思ったのである。神妙なことである。

保安寺へ東御方・上臈・塔頭御寮恵芳・菩提院尊性房・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・局女・女官が行った。説法はとても素晴らしかったそうだ。

新堂の僧が観無量寿経を説く

八日、雨が降ったが、昼には晴れた。法安寺へ行った。宮家の女性たち、東御方・廊御方・二条局、田向三位・重有・長資ら朝臣を連れていった。玄経や二人の局女も同道した。惣得庵主と山田香雲庵主はいつもの通りである。女性たちは新堂での談義も聴講した。観無量寿経を説いたそうだ。

九日、朝から小雨が降ったが、夕方には晴れた。今日は彼岸の初日である。いつものように身を浄めた。法安寺に行った。彼岸の間、毎日、説法を聴講するつもりだ。東御方・廊御方・上臈・二条殿・芝殿・塔頭御寮恵芳・玄経・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・女官らも来た。惣得庵主と山田香雲庵主はいつもの通りである。

椎野寺主、彼岸中に休暇をとる

聴講している間に、椎野寺主がやって来て、同じく聴講なさった。彼岸の間、休暇をとったという。僧侶であるのに、彼岸に休暇をとるなど理解できないことである。

十日、晴。法安寺に行った。椎野寺主も同じく行った。上臈・塔頭御寮恵芳・芝殿・初参加の庭田家の女性・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・局女らも行った。惣得庵主と山田香雲庵主はいつもの通りで

ある。

九条満教関白へ掃除人夫を貸す

さて九条満教関白が唐橋在豊朝臣を通して、連絡してきた。伏見荘の人夫数十人をお貸しいただければうれしいです、とのことだった。これは今月中に関白家へ室町殿を招待するために、掃除の人夫が必要であるとのことだった。問題ありませんので、お貸しいたしましょうと返事をした。

さて木幡郷との境界争いのことで、幕府の事務取扱担当者である飯尾が去る三日、室町殿へこの件についてお伺いを立てたそうだ。それで飯尾は、下級の役人を派遣して詳しいことをご説明下さいと連絡してきた。それで小川禅啓を飯尾のところへ向かわせて、こちらの言い分を話したところ、「敵方の訴状も取り合わせて報告をしないさい」と室町殿が仰ったそうだ。それで木幡の訴状を急いで取り寄せて下さいと飯尾が話したという。それで、木幡へ書類を急ぎ提出するよう、連絡させた。

十一日、夕方から夜に至るまで、大雨が降った。法安寺に行った。椎野寺主・二条殿・芝殿・塔頭御寮恵芳・玄経・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・局女らも同じく行った。惣得庵主と山田香雲庵主はいつもの通りである。

今出川家へ八朔贈答のお返し品の品を送った。

十二日、晴。今日は彼岸の中日である。いつものように身を浄めた。法安寺に行った。椎野寺主・廊御方・田向三位・重有・長資ら朝臣・二人の局女・女官らも行った。惣得庵主と山田香雲庵主はいつもの通りである。法華経第二巻の講義が終わった。

説法僧の血脈

さて宮家の女性たちは今夜、説法をしている学問僧に在家信者の法門との結縁を表す系図を作成してもらいに行った。彼女たちはこの学問僧を信仰しているので、仏法上の縁を結ぶためである。その面々は、東御方・廊御方・上臈・二条殿・塔頭御寮惠芳・玄経・局女の別当・惣得庵の尼たち・田向家の仕女らである。法安寺の一室で、系図に書き込む儀式があつた。その作法は嚴重なものだつたそう。系図の書き込みが終わつて、学問僧は目連悲母経について説法なさつたそう。

ところで、新堂での説法を、夜陰に紛れてお忍びで聴講した。堂の中はひどい場所だったので、庭で立ち聞きした。侍臣たちも一緒だつた。説法の内容はまずまずで問題なかったが、弁説の鋭さでは法安寺の学問僧には及ばないようだ。一時間ほど聴講して帰つてきた。

十三日、晴。朝早く宮家の女性たちが仏法の結縁を示す系図を持って、皆一緒に法安寺へ行った。そこで少し儀式があつたそう。その後、説法を聞いてきたという。椎野寺主・田向三位・重有朝臣らも寺に行った。説法は手早く終わったそう。

私は光台寺の風呂に入った。世尊寺行豊朝臣が同道して、彼も風呂に入った。行豊は明日、石清水八幡宮へお参りするそう。

さて今日は普明国師の三十三回忌である。普明国師の弟子たちが奔走して大仏事を営むそう。

室町殿、死穢を避ける

昨日、勒王院ではお経を略読して供養する法会があつた。室町殿

も勒王院の法会に参列なさつていた。ところが、寺中で力者法師と駕輿丁が喧嘩をはじめ、刀で突き合つて死んでしまった。それで室町殿は急いで勒王院をお出になつたそう。来たる十八日に石清水八幡宮にお籠もりする予定なので、死の穢れを避けるために金剛院へ避難なさつたそう。

今日は金剛院で仏事がある。およそ一万人の僧を供養し、非人に施しをするなど、これほど盛大で数多い仏事は他に比べようもないくらいだ。

十四日、晴。法安寺へ行った。椎野寺主・東御方・重有朝臣を連れて行った。塔頭御寮惠芳・玄経・二人の局女・女官・惣得庵主・山田香雲庵主はいつものように来ていた。

田向家青侍日向法師、風邪で死ぬ

さて田向家の侍である日向法師がこのところ風邪をひいていた。そしてたつた今、死んでしまったそう。先日、田向家に行った時に、日向法師を私の御前に呼び出して、酒を与えたばかりであつた。朗詠を歌う声（※）がよくて面白かつた。しかしこのように訃報を聞き、大変かわいそうに思う。眼前の無常に驚かされるばかりである。

田向三位・長資朝臣・行豊朝臣は石清水八幡宮へ参詣しに行った。※「朗詠を歌う声」：原文には「詠う音曲」とある。

十五日、曇りで、夕方に小雨が降つた。今日は、彼岸の最終日である。いつものように身を浄めた。放生会の実施責任者の公卿は、久我清通大納言、参議の役は中院通淳朝臣、弁官の役は葉室宗豊朝臣、警備責任者は田向長資朝臣である。

新しく任命された石清水八幡宮の社務は、田中である。神人たち

の訴訟もなく、すべて平穏無事に放生会は終わったようだ。夕方には田向三位と長資朝臣は帰ってきた。御神輿の渡御は早くも午後三時半には終了したそうだ。

法安寺へ行った。その前にまず御香宮へお参りし、その後、寺に向かった。椎野寺主と重有朝臣を連れて行った。東御方・廊御方・上臈・二条殿・玄経・局女・惣得庵主・山田香雲庵主らもいつものように来ていた。

用健の老母・宝珠庵

用健の老母である宝珠庵(※)も聴講なさっていた。説法が終わってから、宝珠庵に挨拶をした。伏見荘内に住むようになってから、初めてお会いした。よほどうれしかったのだろうか、何度も涙を流しておられた。

昔、御所にお仕えしていた時、私が少年であった際にお会いしていた。それ以後、只今久しぶりにお会いしたのだ。昔の思い出話などや今の思いなどをお話になった。年齢は七十一になるそうだ。梅津の寺を出られて、この春に蒼玉庵に住まわれるようになった。

四人の継母

父・大通院に仕えた女性たちのうち、四人が存命である。この宝珠庵は、かつて廊御方と呼ばれており、儀同三司(※)の三条実音の娘である。それに東御方・廊御方・典侍禅尼らである。この四人は皆、私の継母である。この四人には、もともと孝養を尽くす所存である。

今夜は名月である。ただし空が曇っているのが残念だ。いつものように型通りのお月見をした。田向三位・長資・行豊ら朝臣がお月

見に参加した。皆が集まると窮屈なので、一か所に集まるのは止めた。それでお月見の和歌を詠み合うのは断念した。私と椎野寺主だけで和歌を詠んだ。

※「宝珠庵」：用健の老母は蒼玉庵主である。宝珠(庵)は法名か。※儀同三司(ぎどうさんし)：三司すなわち太政大臣・左大臣・右大臣と同様であるという意味で、准大臣の称号のこと。

法安寺滞在の竜山は無欲の人

十六日、晴。今日、九条関白家へ伏見荘の人夫五十人を派遣した。

法安寺の住職が来て、滞在中の学問僧のことについて話をした。お経を読んだり、法門結縁の系図を書いたりしたことで、信者の人々が寄せてきたお布施などを学問僧は法安寺に寄付した。それによって、鐘撞き堂の屋根を葺き替え修理することができたそうだ。住職は学問僧を無欲の人だと褒めた。それで私もますますこの学問僧を信仰する気になった。田向三位・重有・長資ら朝臣が説経を聴講しに行った。

聞くとところによると、斯波義淳勘解由小路左兵衛佐の家人である甲斐が、今日、死去したそうだ。

十七日、晴。九条関白が唐橋在豊朝臣を通して人夫派遣のお礼を言ってきた。法安寺へ東御方・玄経・田向三位・重有・長資ら朝臣が出てかけていった。

寿蔵主の隠棲

さて寿蔵主が小隠と称する小さな庵を新築して、その庵へ移住したそうだ。行蔵庵は洪珠侍者に譲ったという。行蔵庵の領地もすべて洪珠侍者が管理するようにして、その内から生活費だけを寿蔵

主に割り当てることにしたようだ。これは寿蔵主が高齢になったので、隠居するための措置だという。

十八日、晴。法安寺へ行つた。椎野寺主・田向三位・重有朝臣・長資朝臣も行った。宮家の女性では東御方・玄経・二人の局女、それに惣得庵主と山田香雲庵主がいつものように行っていた。法華経の第三巻を読み終わった。

十九日、晴。法安寺へ聴講に行つた。椎野寺主・廊御方・芝殿・塔頭御寮恵芳・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・局女らも行った。惣得庵の稚児らも来ていた。

来たる二十五日に朝廷による豊作祈願のため神社に捧げ物をする儀式が行われるそうだ。田向三位も出仕するようにと、事務取扱者の坊城俊国から催促を受けているという。田向家の侍が死んだため、田向三位は触穢の状態にあるので、神事に参列するのは差し障りがあると連絡したそうだ。

聞くところによると、室町殿は今日から石清水八幡宮にお籠もりするそうだ。

二十日、昨夜から雨が降っていたが、朝には晴れた。いつものように、身を净めた。法安寺へ聴講に行つた。椎野寺主・田向三位・重有・長資ら朝臣、宮家の女性では東御方・廊御方・二人の局女らが行った。惣得庵主と山田香雲庵主はいつものように来ていた。数時間、説法が行われて、夕方に帰った。

今夜の午後九時、清水辺りで火事があつたそうだ。

二十一日、朝に雨が降つたが、昼には晴れた。十日ごとの雅楽練習会を二回ほど怠けてしまった。それで音楽の練習をした。平調の曲を

五つと朗詠などをした。長資朝臣も練習に参加した。法安寺へは田向三位・重有朝臣・長資朝臣が行つた。

二十二日、晴。行蔵庵の後見役である珍蔵主と洪珠侍者が来た。対面して、すぐに出ていった。これは、洪珠侍者が行蔵庵へ移住してきたことによる拝礼だそうだ。

東御方・玄経・田向三位・重有朝臣・長資朝臣が法安寺へ行つた。

明日は法華経の見宝塔品の説法だそうだ。この品について説法する時には花を供えるものだそうだ。聴講する面々がそれぞれ花瓶一瓶の花をお供えなさるようにと、学問僧が言つたそうだ。

松茸狩り

夕方に月見岡へ行つた。重有・長資朝臣と慶寿丸を連れて行つた。松茸はまだ一本も生えてなかった。松茸が採れなかったのは無念である。

二十三日、雨が降つた。法安寺へ行つた。椎野寺主・東御方・廊御方・芝殿・塔頭御寮恵芳・玄経・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・稚児の聖乗・稚児の梵祐・二人の局女らも行った。惣得庵主はいつものように来ていた。山田香雲庵主は来ていなかった。

法華経見宝塔品の説法

今日は法華経見宝塔品の説法である。道場はきれいに飾られており、本尊仏の脇左右から東西方向に聴講場所の前で折れる形に、机が数十脚立て並べてあつた。その上に花瓶が五十あまり置いてあつた。それで道場内が照り輝くばかりで、素晴らしい様子だった。聴講する僧侶や俗人が大勢、群れ集まっていた。説法はすばらしかった。弁舌は、清水が湧き出るように滞ることはなかった。説法の言

葉はまるで宝石を吐き出すようだった。とてもありがたい説法だった。

私は銀製の水差しと香台で花をお供えた。椎野寺主も花瓶一瓶、宮家の女性たちも一瓶、田向家も一瓶、庭田家も一瓶、宝蔵院も一瓶、惣得庵も一瓶。それに寺庵の僧たちや村人たちも大方、花をお供えていた。五十あまりの花瓶が出されていたようだ。説法を聴講する前に、法安寺が私たちに酒を振る舞った。道場内での飲酒はよろしくない事だ。夕方に説法が終わって、帰った。

夜にまた説法があった。宮家の女性たちは聴講しに行った。

二十四日、朝に雨が降ったが、夕方には晴れた。法安寺へ行った。椎野寺主・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・寿蔵主・稚児の聖乗らも行った。宮家の女性たち、東御方・二条殿・芝殿・塔頭御寮東方・玄経・二人の局女らも行った。惣得庵主はいつもの通り来ていた。法華経第四巻の説法だった。

石清水八幡宮警護・土岐一族の喧嘩

さて室町殿が石清水八幡宮にお籠もりしている最中、去る二十二日に土岐一族の二人が口論となり、刀で突き合ったそう。土岐は薬師堂を警護していたので、急いでこの二人を境内から引き出したが、その途中で死去したそう。

この騒動で、京都にいる武家の面々も石清水八幡宮に馳せ参じたという。土岐一家の内輪もめである上に、兩人とも命を落としているので、当座の処分としては何もなされなかったようだ。

法華経提婆達多品の説法

二十五日、雨が降った。法安寺へ行った。椎野寺主・田向三位・重有・

長資ら朝臣・寿蔵主・稚児の梵祐、宮家の女性たち、東御方・廊御方・二条殿・田向経良の娘あや・塔頭御寮東方・玄経・局女・女官らも行った。惣得庵主もいつも通り来ていた。法華経提婆達多品の説法はすばらしかった。

今日、朝廷による豊作祈願のため神社に捧げ物をする儀式が行われたそう。

二十六日、晴。法安寺の説法を聴講しに行った。椎野寺主・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・稚児の聖乗、宮家の女性では東御方・廊御方・庭田家の女性・女官・惣得庵主らも行った。法華経提婆達多品の説法が終わった。説法がありがたくて、感動の涙を流した。

二十七日、晴。法安寺へ重有朝臣・長資朝臣・塔頭御寮東方・玄経らが行ったそう。椎野寺主は自分の寺へ帰った。

法華経安樂行品の説法

二十八日、雨が降った。法安寺に行った。田向三位・重有・長資ら朝臣も行った。いつものように惣得庵主も来ていた。今日は聴講者がほとんどいない。法華経安樂行品の説法はすばらしかった。聴講し終わってから、風呂に入った。

秘曲流泉・啄木の伝授

さて私は秘曲三曲の内、両流泉(※)をいまだ伝授されていない。楊真操は父の大通院がお授け下さった。残る二曲を今出川公行前左大臣に伝授してほしいと思っていたところ、「私が伏見宮家に参るのが遅れそうなので、まずは両曲伝授の証明書を書いてお送りします」と左大臣が言ってきた。「このようなやり方は先例もあるので、問題はありませぬ」とも言ってきた。それで今日は吉日なので、両

曲伝授の証明書を通にまとめたものを書き送ってきた。

両曲一度に伝授の佳例

およそ両流泉を一度に伝授された例として、伏見天皇・後伏見天皇・後醍醐天皇の三つが佳い先例である。このような先例に基づいて、一度に両曲を伝授してもらうことを約束した。それで両曲伝授の証明書を一つに書き載せてもらったのである。

だいたい、まだ伝授される以前に証明書を書いてもらうというのは、遠慮すべきであるといえなくもない。しかし師匠が免許してくれた上は、とりあえずめでたいことである。本枕（※）は、実際に伝授してもらう際に進上しよう。

万秋楽の秘説・序三帖と奥二拍子説

今出川公富中納言は、万秋楽の秘説である序三帖・奥二拍子説を、今日、父の公行前左大臣から伝授されたそう。

ところで、葉室宗豊朝臣は、今日八朔御憑の贈答品を献上してきた。「八月一日は取り乱すことがあったので、今まで遅れてしまいました」と言ってきた。当年は室町殿が贈答品の受け取りを停止なさったので、この伏見宮家に対しても贈答を止めたのかと思つていたところ、このように例年と変わらず送ってきたのは、望ましいことである。

※「両流泉」…楊真操とならぶ三大秘曲である流泉と啄木のことである。

※本枕：未詳。応永二十三年六月二十一日条にも、秘曲伝授の際に本枕としてもらった琵琶という内容の記述がみえる。

石清水八幡宮奉納勧進の和歌

二十九日、雨が降った。四条隆盛朝臣が石清水八幡宮に奉納する和歌を集めているという。その和歌の題五首を重有朝臣に渡して、「皆さんも和歌を詠んで八幡神と縁を結んでください」と言っているそう。

私も神を敬っているので、和歌を一首詠んで神様と縁を結ぼうと思う。和歌の題は「里の梅」である。

山里も 春の光はもらさねば 藪しもわかず 咲ける梅が枝
この和歌の作者名を「重賢」と書いた。重賢は慶寿丸の実名（じつみょう）である。椎野寺主も一首、田向三位・重有朝臣・長資朝臣も各々一首、和歌を詠んだ。この奉納の施主は誰なのか不明である。隆盛朝臣は取り次ぎ役に過ぎないよう。

法安寺へ田向三位と重有朝臣が行った。

行蔵庵の庵開き

今日は洪珠侍者による、行蔵庵の庵開きである。伏見荘内の寺庵の僧たちをこの庵開きに招待したそう。

三十日、晴。北野南大路に岡殿の御寺が出来たので、そこへ御移住なさったそう。北山の元の御寺が荒廃したので、室町殿のお計らいによつて新しい御寺が岡殿に進上されたそう。今日、岡殿に手紙を出して、お祝いを申し上げた。

貞成、法安寺大般若経の巻名を書く

さて法安寺の大般若経の一部を新たに書写するという。そのお経の表紙の巻名を私に書いてほしいと法安寺の住職が頻りに望んできた。そこで悪筆を顧みず、第一帙から第十帙までの大般若経百巻の巻名を書いた。これによつて現世と来世でも仏との縁を確実

に結ぶことができるであろう。

説法を聴講しに、東御方・廊御方・田向三位・重有・長資・行豊
ら朝臣が法安寺に来た。

さて室町殿はこの二十八日から御風邪がひどいらしい。石清水八
幡宮にお籠もりしていたときから、病気の気配があつたそうだ。

(続)